まっすぐチャレンジしています

今期は、新しい局面に向かいあっています。ひとつは、3期目というキャリアに加えて、これまでと違う会派の位置づけといった点、それと、3期続けて議会内の年齢構成で下から6分の1にいることで、（若手）としての責任です。

3期目ということでは、これまで通りの政策提案や形成はもちろん、委員会などを通じた活動に取り組んでいます。会派は、自分より年上の1期目の議員の方3人を加えた「鈴鹿の風」として再編、後藤議長に次ぐ2番目のキャリアとして、会派の動きについて新しい役割に取り組んでいます。

今年は、鈴鹿の風の会派長として、各派代表者会議や広報広聴会議で発言しています。このような状況は、自分にとって必要な経験と思っています。

▶（写真中央）地域福祉委員長として委員会の審議を進行

芳野県議と同席で学生と意見交換
▼（写真中央）

委員会の活動を充実

昨年度は生活福祉委員会の副委員長に就任、地域包括ケアシステムや地域づくりを委員会の調査事項に取り上げ、行政とやり取りを進めてきました。

今年は前年度の委員会を継続する形で、地域福祉委員会の委員長に就任しました。委員会では子どもの貧困と地域づくりを中心に取り上げて調査と審査を行っています。

地域づくりは大きな課題ですし、地域包括ケアとの関連なども含めて、重要な時期です。しっかりと議会の立場から行政に意見を伝え、政策に取り組んでいきます。

学生インターンを受入

今年から、NPOドットジェイピーから大学生のインターン生を受け入れています。受け入れにはNPOに協賛金を納入するのですが、自分としては報酬増分を、若い世代を受け入れることで還元する考えで取り組んでいます。

三重大と中京大から学生が来てくれたのですが、議会と市民と行政の関係の説明から入り、その後、一般質問など、行政とのやり取りを聞いてもらったり、学生にも予算・決算書を読み込ん担当課での聞き取りを体験してもらったりしています。

自分自身もその中で学ぶことが多くあります。これからも受け入れを行い、若者と政治について、常に意識したいと考えています。

議会と議員のあり方が問われています

鈴鹿の風は昨年5月の議会運営委員会で、特別委員会のテーマに、議会定数のあり方（定数減を含む）を提案しましたが、定数について議会運営委員会等で議論という流れになり、会派として動向を注視する形をとりました。

しかし、生産年齢人口が減少する中で厳しさを増す財政状況や、その中での公共施設やインフラの維持更新の課題、地域づくりなどを通じて住民自治を充実していくこと、などの政策の動きをを考えあわせると、議会定数のあり方について見直さなければいけない時期に入っていると考えています。

市の動きに課題あり
〈鈴鹿の地域づくり〉

そのまちに住む住民による地域づくり団体は、行政の下請け組織ではないと考えています。

地域の枠組みは、多くの世代の住民意見と参加の上で考え、その上で、地域の計画を作るべきです。しかし、鈴鹿市はその過程をていねいに行っていないと考え、総合計画2023の議案では、その部分に課題があると考え反対しました。

子どもを軸において

数年前から地域づくりに着目し、特に、昨年から地域づくりの先進自治体を数市視察しましたが、おおむね小学校区が基本です。行政は地域づくりの考え方、最低でも、教育に関するコミュニティスクール、福祉に関する地域包括ケア、防災に関する地区防災計画などで、地域について一貫性を持つべきです。ないままでは、住民負担とリスクが大きくなります。この点は、将来にかけて重要ですので、市の動きをチェックします。

子どもの貧困対策について
“貧困＝貧乏”ではありません

「子どもの貧困」への取り組みの関心と必要が高まっています。鈴鹿市議会でも、今年度の地域福祉委員会の調査事項として取りあげました。

私はその委員会に所属し、委員長としてなにが課題なのかを考え、委員会での議論や行政視察での学びはもちろん、10月に宝塚市で行われた全国自治体シンポジウム「地方自治と子供施策」にも参加し、鈴鹿市でどう取り組むべきか考えています。

「貧困」とは？

みなさんにも一緒に考えて頂きたいのですが、“貧困”とはいったいどのような状態なのでしょう。お金がないといった経済的な困窮はイメージのひとつでしょう。しかし“貧困”はそれだけではないことが、先進自治体の足立区や、明石市の事例を学ぶことで整理できました。

「子どもの貧困」は**「子どもが心も身体も豊かに成長できない状態」**です。

だから、経済的な面だけでなく、育児放棄などの課題や、社会と切り離されて孤立することなど、負の社会的相続が起こる状況を含めるべきです。それに向かい合うには、地域社会などいろいろな人間関係を横軸にして、過去から未来にわたる時間を縦軸にして重ねながら、子どもの育ち全体の課題として「貧困」を考えるべきです。このことは、今年の6月に行った一般質問の内容「愛着を育む教育」にもつながります。

例として「ごはんを食べさせてもらえない」という状況を考えると、経済的に困窮して「食べられない」場合もあるでしょうが、所得があっても「食べさせてもらえない」場合もあるでしょう。

どちらも、そのままでは同じ状況が繰り返されやすい課題ではないでしょうか。

そう考えると、それぞれを別々の課題としてではなく、同じ課題として考えて解決に取り組む必要があると思います。

親が子育てをするべきという意見もあるとは思いますが、子育てをできない親もいることについて、私たちは考えるべきですし、子どもを社会として支えることが必要です。

予防施策が大切

この課題に取り組むとき重要なのは、貧困の連鎖を「予防」する観点です。例えば、誰もがいられる居場所づくりに取り組み、そこで必要な子供に必要な支援を行い、貧困の連鎖を断ち切る考えが必要でしょう。そのために学校を活用すべきです。

また「地域包括ケア」の考えに、子どもから青年まで、すべての人を対象として含め、その上で政策を考えるべきです。

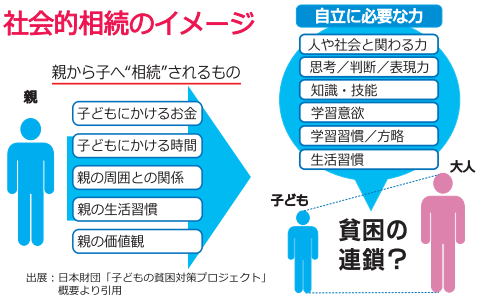
また、貧困対策という表現は「レッテルを貼る」ことにもなります。他人だけでなく、子どもが自分自身の心にレッテルを貼ってしまわないよう、取り組みに注意すべきです。

“貧困”は自分ごととしてみんなで考える課題です。その意味では、高齢者の貧困も同じ視点で考えるべきなのだと考えています。

平成28年 6月一般質問

愛着を育む教育
負の社会的相続を防ぐ

鈴鹿の教育は、大切な人とのつながりの中で、子どもの中に形成される愛着に注目すべきです。愛着の形成は、学力だけでなく社会生活の面からも、子どもの成長に意味がありますが、いろいろな問題を考えると、家庭だけに期待すべきではないと思います。貧困と同じく、愛着障害も「社会的相続」の中に入れ、負の相続の影響を小さくするように考えるべきです。



出展：日本財団「子どもの貧困対策プロジェクト」概要より引用

小学校で愛着を育む取り組みに力を入れるべきです。施設運用を見直し、愛着を育む場として学校施設を活用すれば、すべての子どもにとって、地域への愛着、地域との愛着を育てる場になるでしょうし、地域人材や団体との連携が重要です。ここから、学校区と地域への愛着の関係についてを問いました。

市はこれまでの取り組みに、子どもたちの「愛着を育む」という観点を組み入れ、学校と地域の関係、学校での子どもの居場所、学校施設と子どもたちの関係などについて見なおすべきです。その意味で、子ども条例の制定は検討課題です。

つれづれなつぶやき

議会で他の方の発言を聞いていると、ときどき“ん?!”と感じることがあります。さささいなことでしょうが、こういうことには、考えがにじんでいるのだろうな…と思っています。

少し前ですが、行政に対して「課題解決のために7百万円くらい出せないのか」との発言がありました。みなさんはこの言葉をどう感じるでしょうか。

たしかに、予算が必要な場面があると思いますので、言葉すべては否定はしません。また、一般会計で年間6百億円近くが鈴鹿市では動いていますので、7百万円は小さく感じられるのかもしれません。しかし、普通の市民感覚や視点からすると、7百万円は“くらい”と表現される額ではないでしょう。それだけ稼ごうと思うと、どれだけ大変なのか。そして、鈴鹿市が扱うお金は、税金がもとになっているはずです。そのことをどう考えているのか…?。

夕張など財政破たんをした自治体でも、なにかを実現したり、箱モノを作った方々は、その当時はいい議員さんだったのかもしれません。しかし、現在をみると、子供たちの未来を前借りして今を満たす考えは、つまるところ私たちの未来も食いつぶすということなのでしょう。

なにを財源にして実現するのか、自分はそれを重視して、これからも政策提案をしていきたいと思います。